

88mの余白

- 藍による分断された水との関わりを再考 -

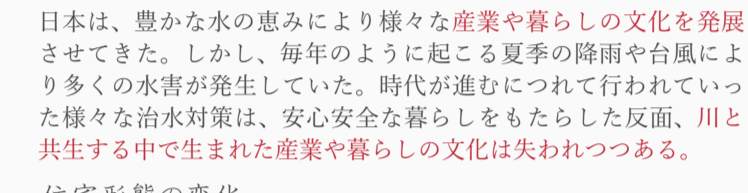
徳島県を流れる吉野川の流域沿いは、河川氾濫による洪水被害とともに、肥沃な客土による良質な藍の生産を可能とし、街の主要産業として大きく栄えた。しかし、近年の治水工事により川と街との関わりは薄れている。本提案では、そんな環境により生まれた余白を、藍産業の生産拠点として再編し、藍を介した新たな水との関わり方を再考する。



01-a: 社会背景 / 水害という環境

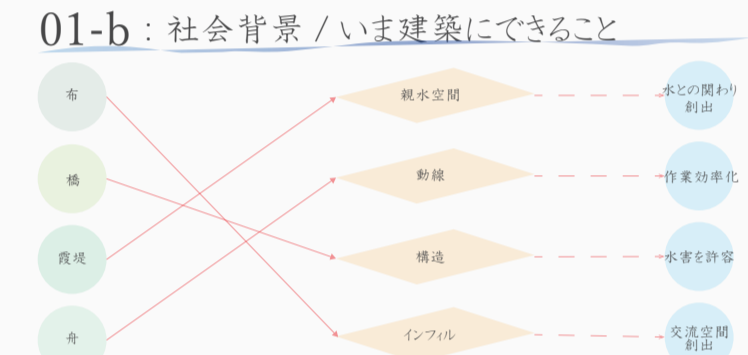
水害という環境

日本は、豊かな水の恵みにより様々な産業や暮らしの文化を発展させてきた。しかし、毎年のように起こる夏季の降雨や台風により多くの水害が発生している。時代が進むにつれて行われていた様々な治水対策は、安心安全な暮らしをもたらした反面、川と共生する中で生まれた産業や暮らしの文化は失われつつある。

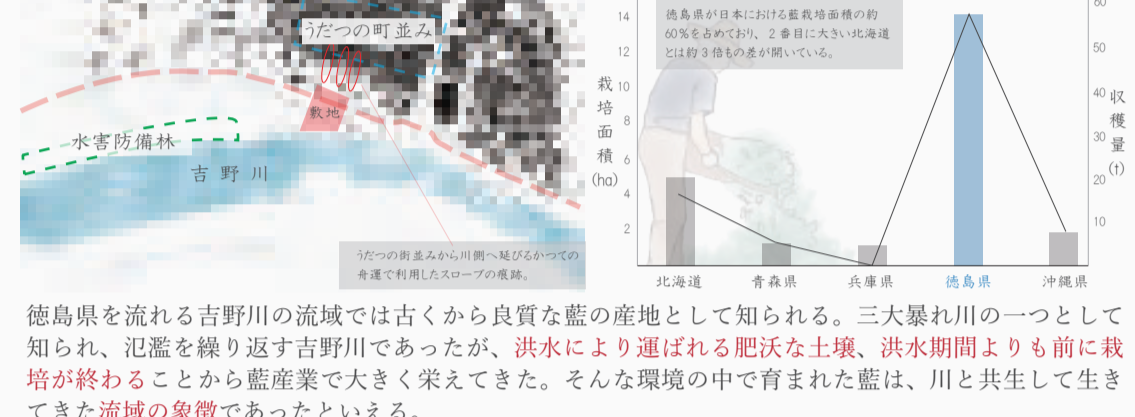


01-b: 社会背景 / いま建築にできること

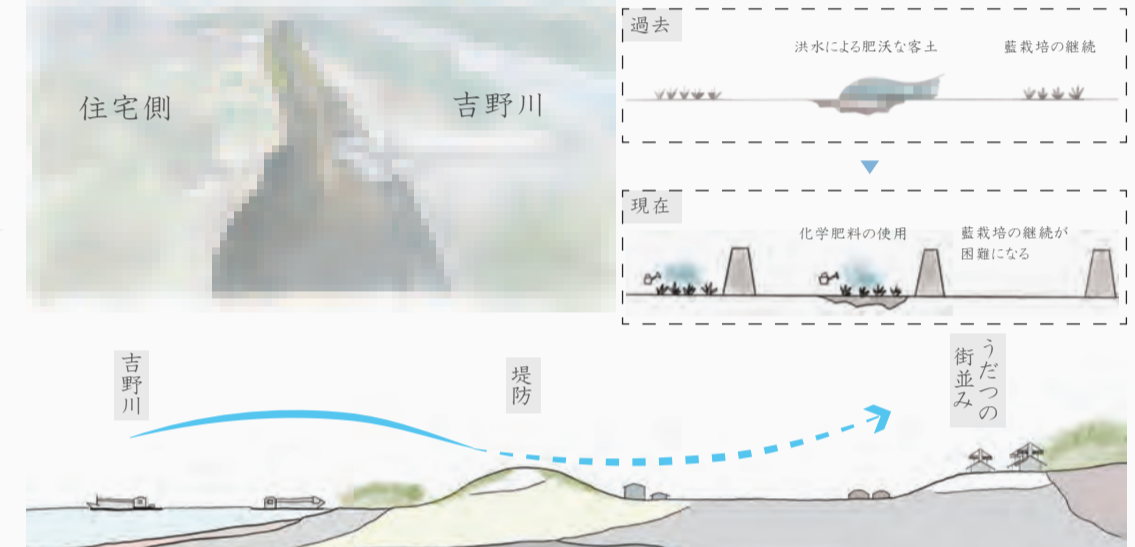
水害を意図した住居形態は、堤防ができることにより、浸水する心配がなくなり減少していった。それは、季節ごと洪水が起きる際、住居形態の変化や、水害知識、地域コミュニティの希薄化が水害と共生してきた街に新たな被害をもたらす可能性があり、川と共生してきた流域の象徴である水害共生の知恵は受け継がれていかなければならない。



02-a: 計画敷地 / 徳島県美馬市



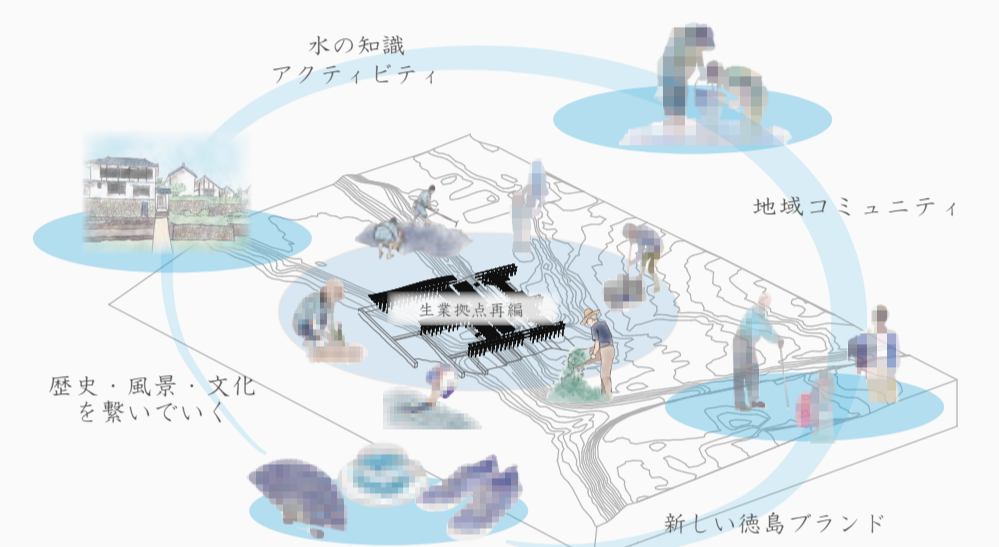
02-b: 計画敷地 / 築堤による自然サイクルの喪失



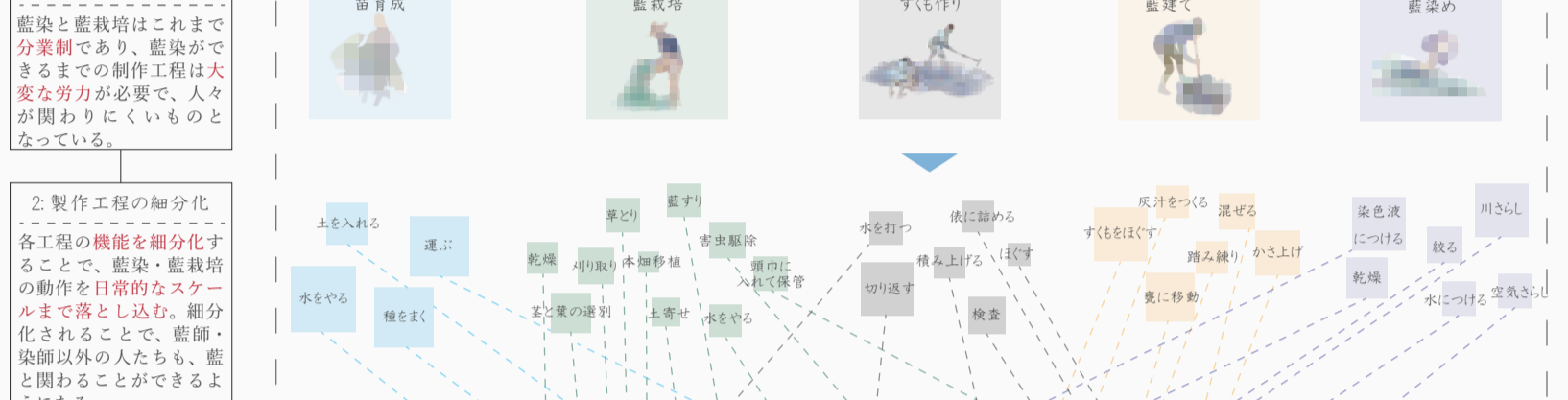
02-c: 計画敷地 / 水害とどこにある暮らし



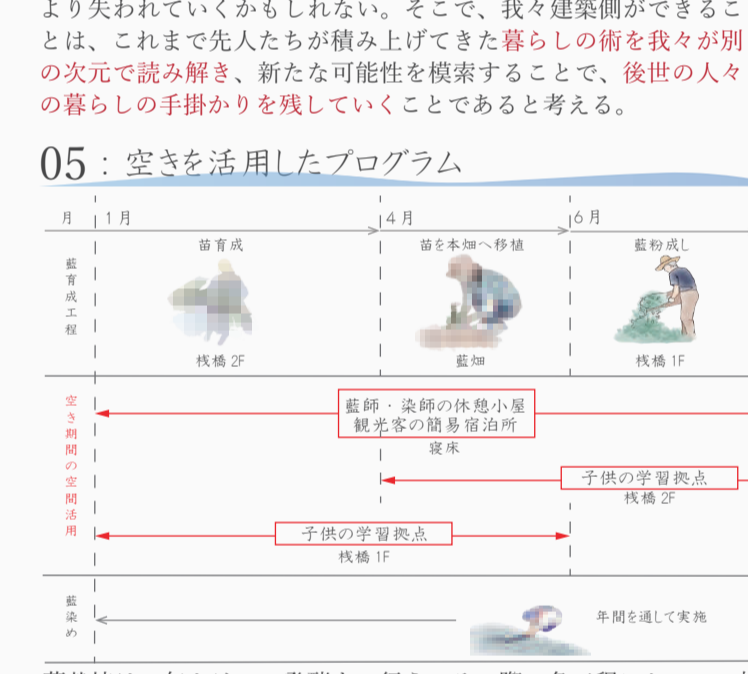
03: 提案 / 分断されたマチと川を藍で繋ぐ



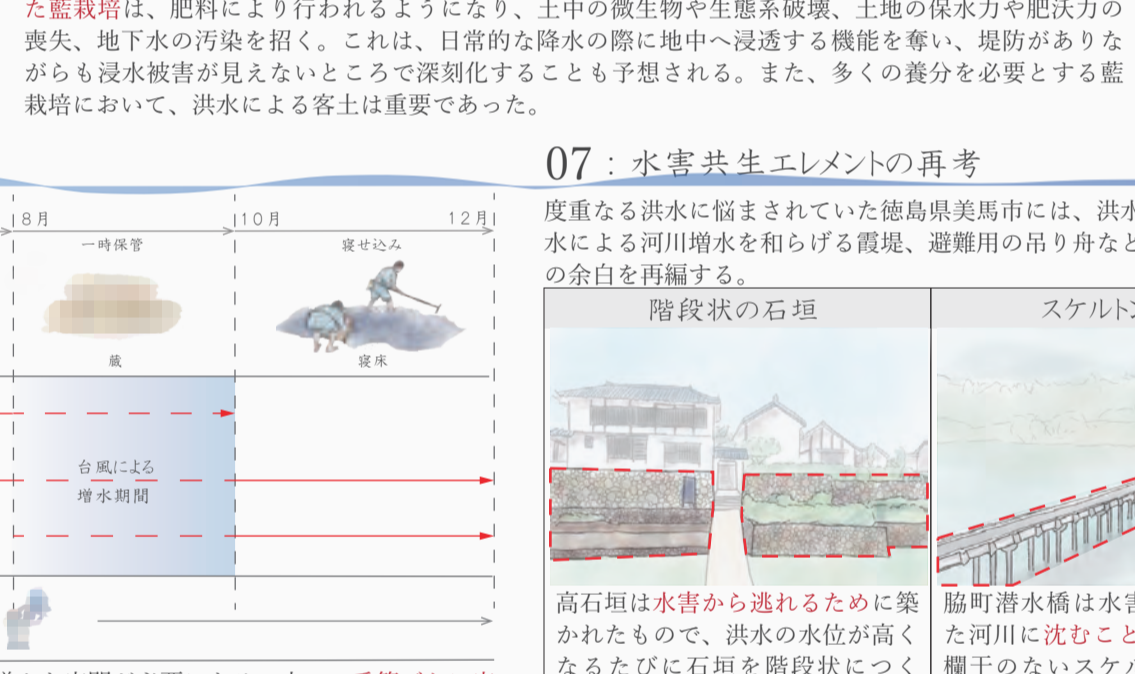
04: 製作工程の細分化



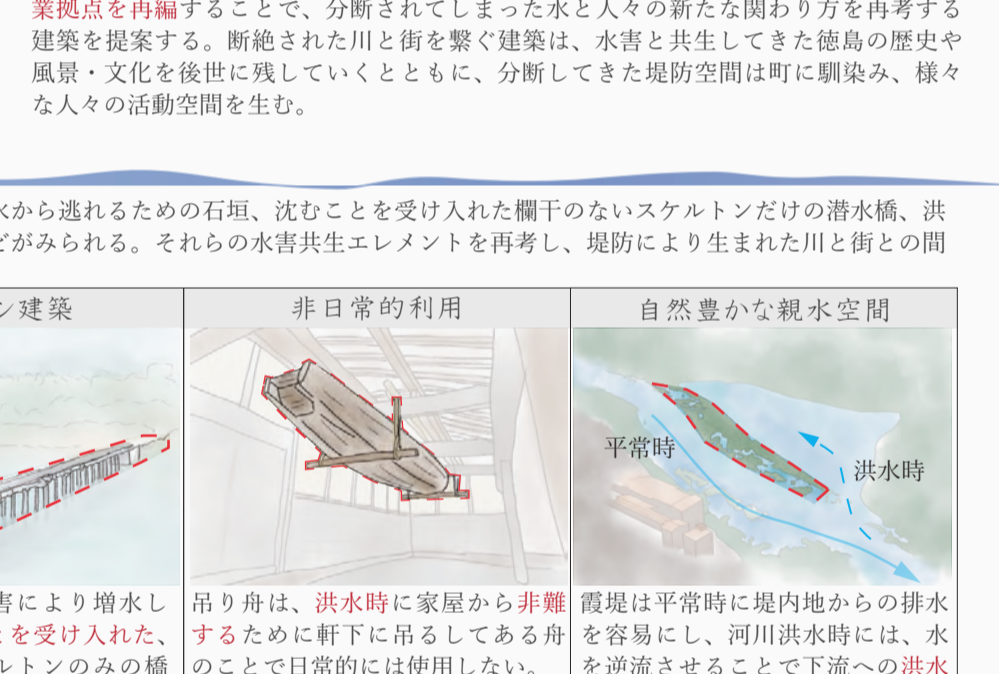
05: 空気を活用したプログラム



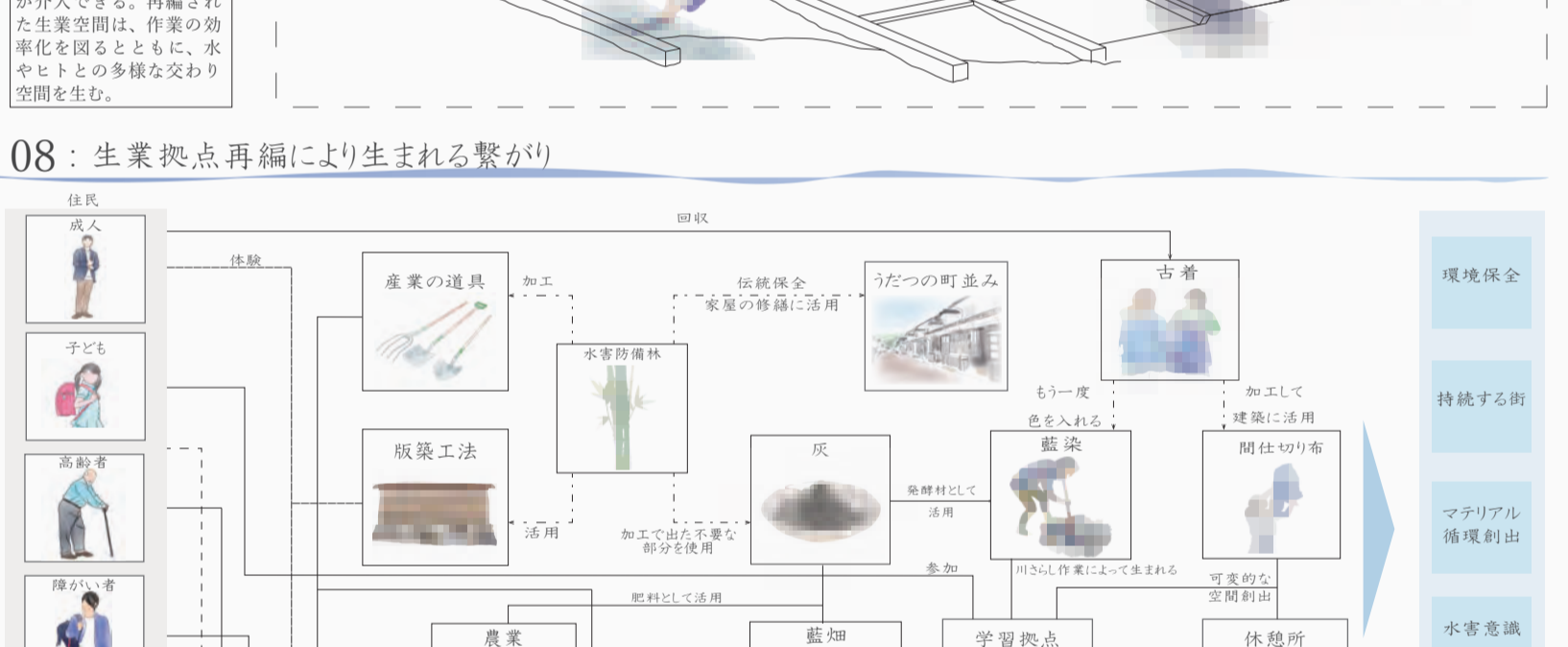
06: 舟運の痕跡から解く建築プログラム



07: 水害共生要素の再考



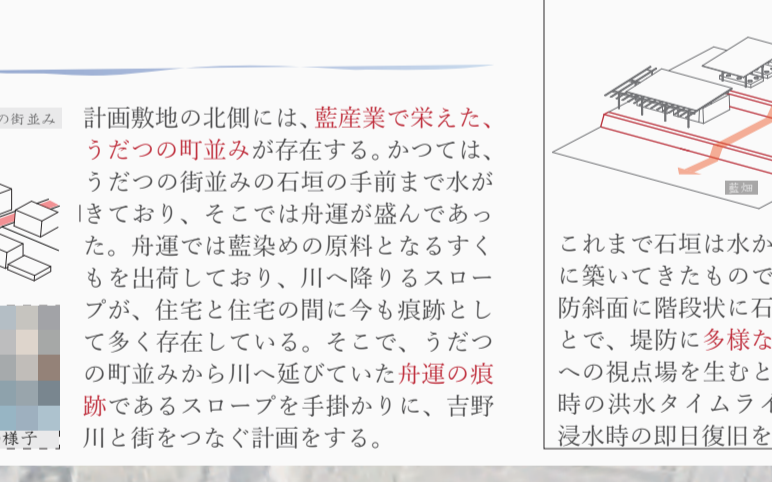
08: 生産拠点再編により生まれる繋がり



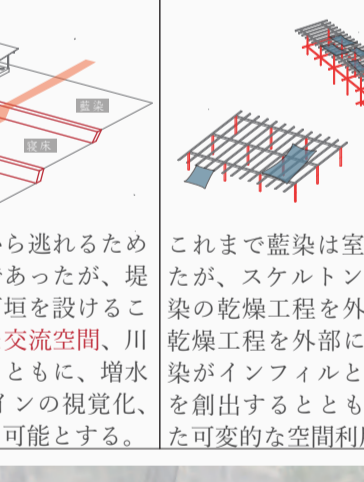
09: 敷地周辺の動線分析



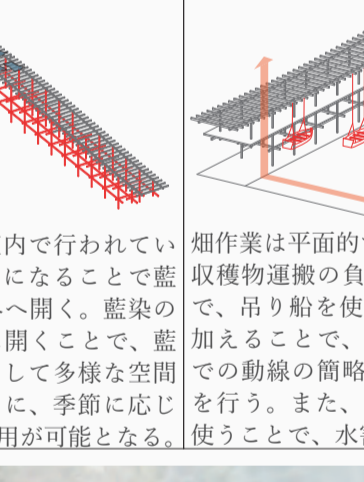
10: 階段状の石垣



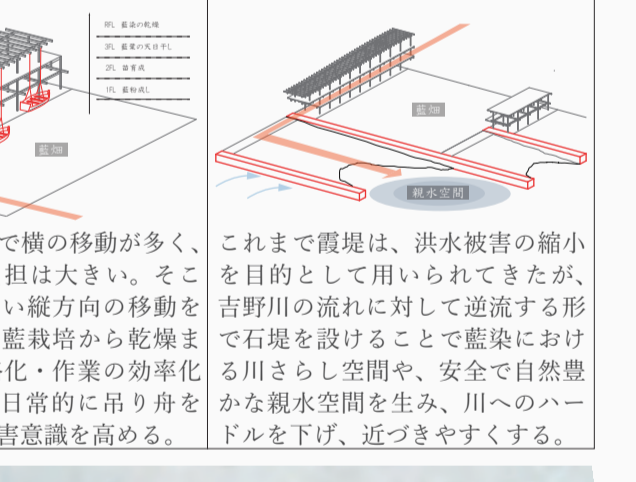
11: スケルトン建築



12: 非日常利用



13: 自然豊かな観水空間



14: 未整備の水害防備林の活用



15: 浸水を許容することで生まれる



16: 他産業とのサイクル

